ICTニュース

大阪府済生会中津病院　感染対策チーム

2023年5月号
Vol.100
（2023年5月5日発行）

リニューアル！ サル痘あらためエムポックス、流行の兆し？

以前のICTニュース（2022年6月号 Vol.91）にてデビューを飾りましたが、再度の登場です。サル痘（＝モンキーポックス）については、その名称を巡って、WHOが人種差別につながる恐れがあるとして2022年11月から名称を「mpox」とすることを推奨しておりました。日本でもこれをうけて、2023年2月より「**エムポックス**」を正式名称とする方針がとり決められ、今後、政令を変更する予定とのことです。世界各国にて流行が報じられ、日本でも2022年7月25日に、国内1例目の患者が報告されました。当初は、散発的に関東地方を中心に発生報告がなされていましたが、2023年以降、報告数が急増。そして3月20日には大阪府内でも初めて2名の患者が報告されました。その後も4月11日に、兵庫県にて40代の男性の感染が確認等、各地で報告が相次いでいます（図1）。

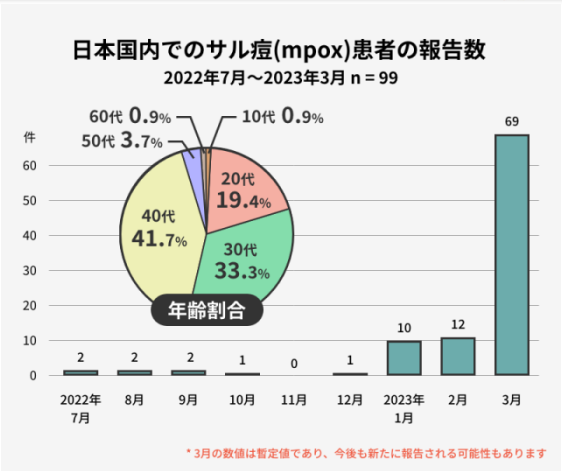

図1. 日本国内でのサル痘（mpox）患者の報告数
（2022年7月～2023年3月）

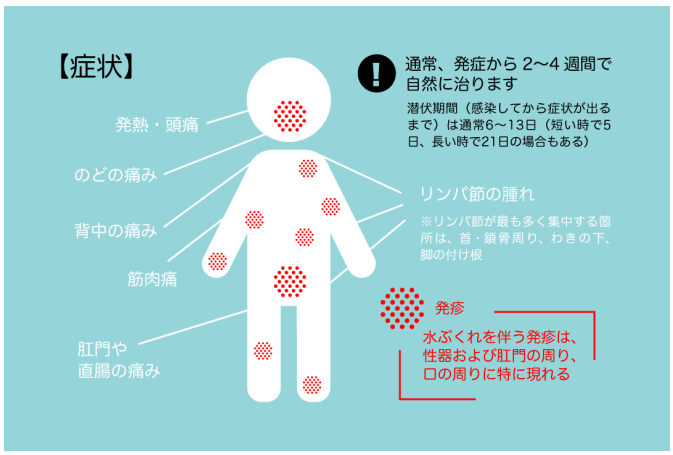

図2. サル痘の主な症状

患者さんはいずれも軽症で、状態は安定しているとのことですが、海外への渡航歴はなく、感染経路も未だ不明のままです。厚労省によれば、2023年4月13日時点で109例の患者が報告されていますが、全員男性。また109名中103名、約94%は海外渡航歴がありません。主な症状は、発熱、発疹、リンパ節腫脹等で、水痘（水ぼうそう）と類似していると言われていますが、最近、発熱等の前駆症状がなく皮疹が出現する症例や、発疹も全身性ではなく、肛門周囲や陰部のみ存在といった非典型例の報告も増加しているようです（図2）。治療法は、欧米ではテコビリマットという抗ウイルス薬が承認されていますが、日本では未承認であり、基本は対症療法のみとなります。予防については、昨年の8月に乾燥細胞培養痘瘡ワクチンLC16「KMB」というワクチンに、「サル痘の予防」の効能追加が認められました。今後は暴露後予防についても検討されてゆく見通しのようです。いずれにせよ、今後も眼を離せない感染症です。　　（腎臓内科　田中敬雄）

祝ICTニュース第100号

愛され続けて100回目発行♡

創刊号（2013年9月）発行から、9年8ヶ月経ちまして今回記念すべき第100号を迎えることができました。これもひとえにICTニュースをご愛読してくださっている皆さまの多大なるご協力ご支援のたまものと感謝申し上げます。今後とも感染対策チームの活動にご協力のほどよろしくお願いします！　　（感染対策チーム一同）

創刊号

第50号

投与開始前に培養検査を

はじめまして、薬剤師の松本です。今年度から感染管理室では専従の感染制御認定薬剤師が交代となり、新しくAST専従薬剤師として活動させて頂くことになりました。よろしくお願いします。

2016年より策定された「薬剤耐性対策アクションプラン」ですが、2023年より新たに成果指標としてカルバペネム系抗菌薬（静注）の1日使用量を20%減らす目標が設定されました。血液培養などから原因菌が確定したのにも関わらず、カルバペネム系抗菌薬をはじめとする広域抗菌薬を漫然として使用することは、①耐性菌発生、②医療費コスト増加、③副作用リスク増大の恐れがあり、望ましくありません。抗菌薬治療の原則として、**抗菌薬投与開始「前」に血液培養を採取することが基本**となっています。そして原因菌が判明すれば、それにターゲットを絞った抗菌薬に切り替えて頂きますようよろしくお願いします。もし抗菌薬の選択・投与量などでお困りのことがありましたらASTにいつでもご相談ください。

（感染管理室　松本芳樹）